

聖書:サムエル記第二 7章8~17節

説教:主があなたのために一つの家を建てる

はじめに

アドベントの第四週目に入りました。およそ二千年前、救い主が私たちのところに人となって来られたのは、神の気まぐれや突然の思いつきではありません。救い主が来られることについては、すでに旧約の時代、神が立ててくださった契約のなかで約束されていたことでした。そのことについて、これまでアブラハム、モーセの場合と見てきましたので、今日は、イスラエルの王であったダビデに語られた神の契約を見てまいります。

1 ダビデ

1) 羊の番をしていた

そこでまずダビデがどのようにしてイスラエルの王となったのかなのですが、ちょうど8節にこう書かれています。「今、わたしのしもべダビデにこう言え。『万軍の主はこう言われる。わたしはあなたを、羊の番をしていた牧場から取り、わが民イスラエルの君主とした。』」

時は紀元前千年頃のこと。イスラエルの最初の王サウルが信仰を失ったのをご覧になった神は、預言者サムエルを召しだし、サウルの次の王となる者を選ぶためにベツレヘムに住むエッサイの家に向かうよう命じます。エッサイには八人の息子がいて、長男から順番に七人紹介されたのですが、主はどれも違うと言われる。そこでサムエルは父親エッサイに、「子どもたちはこれで全部ですか」と尋ねるとエッサイは、「まだ末の子が残っています。今、羊の番をしています」と答え、ダビデが連れて来られた。主は「さあ、彼に油を注げ」と語ったので、サムエルがダビデに油を注ぎ、次の王とした。「わたしはあなたを、羊の番をしていた牧場から取り、わが民イスラエルの君主とした」というのは、そのような事情です。

2) イスラエルの君主とした

そこからダビデの人生は大きく向きを変えていきます。主がイスラエルの王に選んだから順調に王座に就けたのかというとそうではない。むしろその反対で、多くの試練を通されました。サウルが戦いで倒れた後、王の座に就いても、外国との紛争が絶えない苦労の日々が続きます。やっと国内は安定し、ほっとした。その時はたと気がついたのは、神の契約の箱のことでした。自分はすばらし

い宮殿に住んでいるのに、契約の箱はみすばらしい天幕の中に置かれたまま。これでは神に申し訳がない。契約の箱を置くための神殿を造るべきではないのか。そこでダビデは、彼の霊的なアドバイザーであった預言者ナタンに相談をする。そうすると、その夜、主はナタンに語りかけてくださった。それが今日開いている箇所です。

2 ダビデの後に来る者

主が語ってくださったことはいろいろあるのですが、まず最初に目を留めたいのは12節です。

「あなたの日数が満ち、あなたが先祖とともに眠りにつくとき、わたしは、あなたの身から出る世継ぎの子をあなたの後に起こし、彼の王国を確立させる。」

ダビデが死んだ後、あなたの子どもがあなたの跡を継ぐのでイスラエル王国は盤石となる。そんな意味にとれます。それはよいとして、問題なのは「ダビデの身から出る世継ぎの子」とは誰なのかです。

真っ先に思い浮かぶのはダビデの息子たちです。しかし長男のアムノンが弟のアブシャロムに殺され、アブシャロムも事故のような形で死んでいく。結局実際にダビデの跡を継いだのはソロモンでした。それで、皆思うわけです。「ダビデの身から出る世継ぎの子」とはソロモンのことである。一見正しいように見えるのですが、一つだけ辻褄の合わないことが出てくる。16節です。「あなたの家とあなたの王国は、あなたとの前にとこしえまでも確かなものとなり、あなたの王座はとこしえまでも堅く立つ。」「とこしえまでも」とは、永遠にということですが、ではソロモンの王座は永遠に堅く立ったのか。そうではなかった。ソロモンが亡くなるとわずか数ヶ月で国は南と北に分裂し、そのあとはアッシリア、バビロンに攻められて滅ぼされてしまいました。

これは困った。主が語ったことは間違っていたということなのか。それとも、何かの事情で神はご計画を変えてしまったのか。でも、主が立てた契約は絶対に変更されることはないはず。そうすると、「あなたの身から出る世継ぎの子」はソロモンではない。別の方を指すと考えなければならなくなる。結論から言えば、それが二千年前に

来られたイエス・キリストを指す。なぜそう言えるのか。主は三つの証拠を語ってくださっています。

3 キリスト

1) 世継ぎの子を起こす：降誕

まず一つ目。12節をもう一度読みます。「あなたの日数が満ち、あなたが先祖とともに眠りにつくとき、わたしは、あなたの身から出る世継ぎの子をあなたの後に起こし、彼の王国を確立させる。」

もしこのみことばが本当だというのなら、イスラエルの王国を確立させる者は、必ずダビデの子孫でなければならぬはず。それが絶対条件になります。今、ある新興宗教の団体のことがニュースでさかんに取り上げられています。その教団の教祖と言われる方が自分のことを「再来したメシア」、すなわち、「自分はキリストである」と語ったそうです。それが本当かどうか、一般人には区別ができないかも知れませんが、私たちはこの聖書のみことばによってすぐに判別できる。ダビデの血筋でない者が、「私はキリストである」と言ったとしてもそれはすべて嘘です。

イエスはこの条件にあてはまるのでしょうか。ルカの福音書2章4～7節にこうあります。「ヨセフも、ダビデの家に属し、その血筋であったので、ガリラヤの町ナザレから、ユダヤのベツレヘムというダビデの町へ上って行った。身重になっていた、いいなずけの妻マリアとともに登録するためであった。ところが、彼らがそこにいる間に、マリアは月が満ちて、男子の初子を産んだ。」

イエスがダビデの子孫としてお生まれになったことは、このことからわかります。しかし、ダビデの子孫は他にもたくさんいたはずですから、これだけでイエスが、「ダビデの身から出た世継ぎの子」に該当すると決めつけることはできません。他の証拠が必要です。

2) 懲らしめる：十字架

そこで二つ目の証拠になります。14節。「わたしは彼の父となり、彼はわたしの子となる。彼が不義を行ったときは、わたしは人の杖、人の子のむちをもって彼を懲らしめる。」

このことばはちょっと不思議です。未来に登場するイスラエルの王さまのことを神が語ってくださるのはすばらしいことですが、しかしなぜか神は、王が不義を行うことに触れて、そうなったら彼を懲らしめると宣言されるのです。人間の世界ではあり

えないでしょう。王さまが失敗するような話しは不名誉なことだからです。

けれども、もしこれが人間の王ではなく、イエス・キリストのことを指すのならばどうでしょう。「彼が不義を行ったとき」は、「イエス・キリストが不義を行ったとき」となります。もちろん、イエスは神の子ですから不義を行うことはありません。しかし、私たちの罪を背負われたのであれば、父なる神の目には、イエスの姿は不義を行った者に見えます。そうすると、たとえ愛するひとり子であったとしてもそのまま見のがすことはできません。なぜなら神はダビデに約束していたからです。「わたしは人の杖、人の子のむちをもって彼を懲らしめる。」具体的にはどのようにして懲らしめたのかは、おわかりのとおりです。イエスは十字架で罪のさばきをお受けになり、そこで懲らしめを受けられ、死なれました。これが14節の指し示していることです。それはわかったとして、もしここでみことばが終わっていたなら、そこにはなにも希望はなかったでしょう。結局、死という最大の問題はなにも解決されないからです。

3) 王座はとこしえまでも堅く立つ：復活

そこで三つ目の証拠になります。15、16節。「しかしわたしの恵みは、わたしが、あなたの前から取り除いたサウルからそれを取り去ったように、彼から取り去られることはない。あなたの家とあなたの王国は、あなたの前にとこしえまでも確かなものとなり、あなたの王座はとこしえまでも堅く立つ。』」

神がイスラエルの最初の王としてサウルを立てたとき、サウルは主に従順に従う者でした。ところがダビデを部下にかかえたあたりから怪しくなります。ダビデが戦いに出ると連戦連勝の勢いですから、国民の人气が大きくなっていく。そうするとサウルはダビデに対して嫉妬し、今で言う強烈なパワハラを繰り返したので、ダビデは逃げざるを得なくなる。主はそれをご覧になり、サウルをイスラエルの王としたことを悔やみ、それ以来主の霊はサウルから取り去られ、敵との戦いで倒れていきました。「サウルからそれを取り去ったように」とあるのはそのことを指します。

そうすると、「わたしの恵みは、(中略)彼から取り去られるとはならない」とはどういうことになるでしょう。主は、私たちの不義を負って懲らしめを受け、十字架で死んだとしても、それで終わらない。絶対に恵みは取り去られない。主は死からよみがえらる。イエス・キリストが来られる千年

前に、主はダビデに語り、イスラエルの民は、この言葉を信じて救い主が来られるのを待っていた。それがクリスマスです。

4) 主の約束を待ち望む

では私たちはいま、なにを待ち望むのでしょうか。病気のことで苦しむとき、高齢でからだの能力が衰えていくとき、人間関係が壊れてしまいひとりぼっちになったとき、そのままよいと思っている方はだれもいない。病気が治れば、若いときのようなかたがらであれば、あの人と和解してもう一度楽しい日々を過ごすことができたなら。皆、失った大切なものを取り戻したいと待ち望んでいます。それはむなしなことでしょうか。いいえ。そうではない。私たちには確かな約束がある。たとえ今苦しみのなかにおかれているとしても、私たちは絶望する必要はない。パウロはこう言っています。コリント人への手紙第二6章9, 10節。「人に知られていないようでも、よく知られており、死にかけているようでも、見よ、生きており、懲らしめられているようでも、殺されておらず、悲しんでいるようでも、いつも喜んでおり、貧しいようでも、多くの人を富ませ、何も持っていないようでも、すべてのものを持っています。」

二千年前、約束のとおり私たちのところへ来られ、十字架で死んでよみがえられた方こそ私たちの主であることを信じる時、私たちはこのように告白できることの幸いを感謝いたします。